

# 大笑小笑

黒瀬知円編

## 人生 佛心顯現の世界

### 一 希くは此の謎を解け

堀れよ穿てよ、そこに水湧かん。打てよ叩けよ、そこに響あらん。鐘が鳴るかや、撞木が鳴るか、鐘と撞木と合へば鳴る。鐘は鳴るが性、撞木は鳴らすが質。鳴る鐘と鳴らす撞木と、出合つた所に、初めて殷々たる音響を傳へて、鐘も鐘の性を發揮し、撞木も撞木の能を顯現する譯。求めよ、さらば與へられん。聞けよ、さらば信ぜられん。求めずされど與へられたりと云ふ者あらば、聞かずされど信ぜられたりと云ふ者あらば、そはその奥底に、既に業に求めしめられ、聞かしめられし所以あるを知らねばならぬ。撞木の動くや、鐘に鳴る性あればなり。鳴ればこそ打て、響けばこそ叩け。鳴らざるもの響かざるもの、焉ぞ之を打ち之を叩かん。聞けよ求めよ、信仰は獲られ安慰は與へられんのみ。

釋尊すゝめたまはく「設ひ世界に滿てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞かば、會ず當に佛道を成じ、廣く生死の流を濟はん」。親鸞聖人たゝへたまはく「子の母をおもふが如くにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とほからず、如來を拜見うたがはず」。蓮如上人さとしたまはく「いたりて堅きは石なり。いたりてやはらかきは水なり。水よく石を穿つ、心源もし徹しなば、菩提の覺道何事か成ぜざらんと云へる古き詞あり。如何に不信なりとも、聽聞を心

に入れ申さば、御慈悲にて候間信を得べきなり」。

朱利槃特と云ふ人は釋尊の御弟子であつたが、至つて愚な性質で、何を聞いても覺えて居らぬ。至つて忘れることが上手で、自分の名前までも忘れて了ふ。仕方がないから「朱利槃特」と肉太に書いた板を首から胸に下げて居たと云ふ位。智慧は働かず、戒行は守ることが出來ず、我身ながら我身の愚さを嘆き、兄の離波多に叱り飛ばされ、逐ひ出されては、泣く泣く祇園精舎の前にはらく涙を零して居られた。時恰も釋尊はこの様子を御覽になり、近づいて之を慰め、其の所以を御尋ねになると、事の次第を打開けて申上げる。釋尊は可愛想に思召し、「心配するには及ばぬ、怖るゝには及ばぬ」と、慈悲の手に引いて精舎に歸り、一本の箒を授け、「お前この箒の名前を忘れぬ様になさい」と仰せられた。他の弟子の方が教へられるけれども、根が愚な人ゆゑ、箒のホウを思へばキを忘れ、キを思へばホウを忘れて、如何しても覺えられない。朝から晩まで毎日々々、ホウくキくホウくウと云つた風に一本の箒を振り廻しては、一生懸命に覺えやうとしても、あとからく忘れて了ふ。

總じて物忘れにも色々ありますが。有名な天龍寺の峨山和尚が六歳で出家の時、「坊は何處から來たか」と師の仰せに「坊は來た處を忘れた」と答へて禪の妙味を示されたのや。親鸞聖人が「至心信樂己を忘れて、無行不成の願海に歸す」と、他力信仰の極致を顯はされたのやは、善き方の分で、『孟子』の宿替に女房を置忘れた如きは、愛嬌でもあらう。同じ物忘でも斯様なのは、一寸考物。自分の女房の前に恭しく手をついて「さて貴女は何誰でございましてか、偉い親切にして下さる」と尋ねるので、女房は可笑しくて堪らず「まア戲談云つては不可ませんよ、妾は、貴郎の女房」と云へば「はてなそ

んなものがあつたか知らん。女房は面を膨らし「あつたか知らんとは餘り情ない。子供が二人まであるのに」。男は小首傾けて「そんな子供があつたか知らん」。「貴郎困るぢやありませんか、確りしてお呉れよ」。「あゝさうであつたか。して男であつたか女であつたか、お前知つて居るかへ」。「馬鹿らしい。自分の子を男であつたか女であつたか解らぬやうでは」と、女房涙を流して「貴郎よく覺えて居なさいよ。二人で兄と妹」。「あゝ、解つたく、年齢は幾歳であつたかな」。「アレ又歳を忘れて居る、兄が九歳で、妹が七歳。して貴郎二人の名を知つて居りますか」。「サア……」。「又忘れたのかい」。「はい女房が歸つて來たら尋ねて置ませう」。是は横着に違ひない。

朱利槃特はこんなのではなく全く眞劍であつたが、覺えやうと思ふ一心で十日も二十日も經つ内、漸く箒の名を覺えた。斯くて箒の事ばかり考へて居ますと、後には箒は何をするものであらうかと思出した。箒は此で塵を掃除するものである。釋尊は此箒を以て何を教へて下さるのだらうかと考へた。箒は塵芥を除くものである。我身の煩惱は塵埃である。智慧は箒である。智慧の箒を以て煩惱の塵埃を除くのであると思付いた。斯様に漸々と箒のことを考へ來つて、遂に愚な朱利槃特も阿羅漢の悟を開き、釋尊の御前に出て御領解を述べ、「善哉々々お前の云ふ通りである」と、釋尊のお許を得たと云ふことであります。

是に由りて之を觀れば、道は邇にあり之を遠きに求むべからずとの教が、明に此事實の裡にこもつてあるやうに思はれる。悟といふものは、何か高遠い理屈を考へ奥深い理由でも究めねば、得られぬやうに思へども、釋尊の御教はさうでない。釋尊は至極つまらなさうな、何にもなりさうもない、箒を一本あてがはれた計りである。而して朱利槃特も亦此箒一本を大切に

遂にお悟を開かれたのである。我等も亦、彼の如來の御慈悲を高い所に眺めたり、遠い所に求めて、得られぬくと焦つて苦み悶ゆるのは、誠に愚な至りと申さねばならぬ。近くく我等の周圍に漲つてある如來の大悲を、一切の物の上に味はゝねばならぬのであります。

## 二 墻外底の道は即ち禁内底

眼を閉ぢて通つては色も艶も見えぬ。耳を塞いでゐては聲も音も聞えぬ。眼を開けよ。耳を敬てよ。救済は到る所に示されてある。自然界にせよ、人事界にせよ。見る物の上に、聞く者の上に、すべて救済は示されてある。照る月の上にも、咲く花の中にも、散り行く木の葉の間にも、流るゝ水の底にも、救済はある。親の上にも、友の上にも、我身の上にも、日々起り來る社會の事變の裡にも、救済は明に示されてある。聞けよ、こゝに滾々として救済の泉が湧く。看よや、そこに爛漫として救済の花が咲く。天地は皆救済の顯現に外ならない。たとひつまらぬ些細なことの様ではあつても、何事の上にも心を留めて味ひ來れば、汲みてもく盡きせぬ味が溢れて參るのであります。

此點よりして強ち筈一本ではない、扇一本でも悟は得られる。僧あり、麻谷寶徹禪師に問ふた。「如何なるか是れ、風性常住無處不周底の道理」。禪師何も云はずにイキナリ扇子を使はれる、僧怪しみて「承はり及ぶ、風性常住にして處として周ねからずと云ふことなしと。和尚何によつて扇子を用ひ給ふ」と云ふ。禪師答へて「汝、風性常住を知れると雖も、未だ處として至らずと云ふことなき道理を知らず」と。成程風はお前の云ふ通り宇宙に遍滿して居るが。併し扇子がなければ風が出て來ぬでないかと誠められた。扇子によつて風を出す、風は暑熱を拂ふものである。修行の扇子によつて智慧の

かぜ 風を起し、精神の暑熱煩惱を拂ふ。亦快ならずや。

ほんぐわん 本願にめぐり扇の要にて、たゞ尊やと仰ぐばかりぞ

これは如來の本願に値遇せる嬉しさの、限りを詠んだのです。

「春風以和人、雷霆以驚人、霜露以肅人、氷雪以固人、風雨霜露無非教」(『言志録』)と。然り「青々たる翠竹、般若にあらざるなく、鬱

々の香華、豈に實相ならざらんや」。我等の四邊恩寵ならざるはなく、周圍教旨ならざるはない。「如來の眞身は本二なし、物に應じて形を顯はし世間に滿

つ」とや。『華嚴經』と申すは誠に尊い御經であります。此中に私共の一日中の仕事に就ての用意が懇に説かれてある。妻子打集ふた時には、一切

の怨親平等にして永く食着を離るゝやうに思へ。家を出でゝ道を行く時には自分も亦佛の道を履んで悟に至らんを思へ。坂路を上る時には、此三界を出

づるに就いても、心に怯弱を抱かぬ様に思へ。坂路を下る時には、心を謙下りて長く善根を積まんことを思へ。塵多き道ならば、自分に引き比べて、塵

土を離れ清淨の法を得るやうに思へ。塵なき道ならば、自分も常に大悲を行じて、心を潤澤さんと思へ。柔なる美味しい食を得れば、大悲の燻ずる所

我が心も斯くの如く柔 ならんことを思へ。貧しき堅き食を得なば、心に染着なく世間の食着を絶つ様に思へ。其の外澤山な場合に就いて非常に叮嚀に示

されてあります。決して私共の力で、飛付くことも出来ぬ様な、高いく理窟ばかりは教へて下さらぬ。私共の日々夜々、家庭や日暮の上に於て突

き當る、いろいろの事柄や問題に就いて、親しい手近い所で、私共の心の向け様を示して下されたのである。之を見究めねばならぬ。

道は何れにありや。道は何處にあるかと云ふか。近く汝の脚下にあり。昔は趙州從 禪師、南泉普願和尚に問ふて、「如何なるか是れ道」と氣張込んで

云はれると、和尚言下に「平常心是れ道」と答へられたので、趙州は忽ちに頓悟せられた。成程手近い。平常の心是れ道。常並の心夫れが取りも直さず道ぢやと云ふのである。之によつて頓悟せられた趙州禪師に、一僧ありて問ふ「如何なるか是れ道」道とは全體何を云ふのでありますか。師曰く「牆外底」牆根の外にあるぢやないか。すると僧曰く「這箇の道を問はず」そんな道を問ふのではありませぬ。師曰く「那箇の道を問ふ」那箇道を問ふのか。僧曰く「大道」大きな道を聞くのです。師曰く「大道は長安に透る」ウン大道か、大道なら帝都長安に透つて居るぞ、と斯様に答へられた。

斯道は元來一相等にして、牆外底直に禁裡に達す。王公も行き庶民も歩す。遠く千里に達せんとする者も、近く歩を我簷下に發せねばならぬ。「道は邇に在り却て之を遠きに求む」。足下にあるものを頭の上に向つて求めて居る。「事は易きにあり却て之を難きに求む」。人間は氣が利いて居る様で、間が抜けて居る事が多い。「道は須臾も離るべからず」。朝むつくり起きた時にも道がある。顔を洗つて仕事に懸る時にも道がある。私共は常に、道の上につて道の上に働き、道の上に寝ると云ふ風に、日々の行事の上に、行住坐臥時處所縁の上に、如來本願の大道は坦々として開けて居るではないか。

### 三 一心現じて法界悉く道なり

道は何れにありや。道は到る所にあり。「一華開けば天下皆春なり。一たび發心すれば法界悉く道なり」とは『禪林講式』の語。發心した眼から見れば天下の事一として道ならざるはなく、如何なるものからも道を見出し、教訓を發見することが出来る。一青洋畫家、三年間専心修行の後、大に得る處あり更に洋行修得を勧められ、一旦故郷に省し、上京して其恩人に語り言ふ「私は三年間東京で勉強しまして、餘程熟達した事を、今度歸郷して初めて感じ

ました。三年前までは故郷の山水を寫生するに、何處の景色を書かうかと、所々方々を尋ね探して、辛うじて一つか二つを得ると云ふ有様でありましたのが、今度は到る處書題とならざるはなく、何處を寫しても夫々趣があります」と。萬事は恚うあらねばならぬ。

大道は眼前に坦然たり、法界は悉く道なり。牆外底の小路は直に禁内に通ず。見よ。基督は野の百合と空の鳥に神の眞理を悟り。釋尊は曉の明星に無上菩提の正覺を感じ給ふたでないか。この世尊一枝の金波羅華を拈じ給ふ時、大迦葉獨り破顔微笑して、正法眼藏涅槃妙心の付囑を受けたでないか。朱利槃特は一本の箒によりて悟り、慧能は米を精げて悟り、靈雲は桃花の開くを見て悟り、香嚴は竹に當れる小石の音を聞いて悟り、元曉は死屍に溜る水を飲んで悟り、洞山は水を過り映れる己が影を見て悟り、寶積は行乞の際豚肉を賣るに逢うて廓然大悟したではないか。

或は又地を打ちて悟りしもあり、臂を斷ちて悟りしもあり、指を斬りて悟りしもあり、馬より落ちてさととりしもあり、手を拍ちて悟りしも、簾を卷き上げて悟りしも、風の音や燭の光や鳥の聲に悟りし者もあるではないか。其他に於て佐々木志津磨は牛涎の地に曳くを見て懸腕直筆の法を悟り、大雅堂は草中の蛇の驚き逃ぐるを見て畫法を悟り、釋懷素は夏雲の閃き動くを見て草書三昧を悟り。法然上人は疊をおさへて念佛の尊さを語り、蓮如上人は廊下に落ちし紙片に佛恩の重きを感じ、峨山和尚は洗手鉢の水に靈の生命を説かれたではないか。天下何れの處にか如來に當面せざる處やある。

「酒飲めば何時か心も春めきて、借金取りも鶯の聲」。これは酒に一時の快を得たのであらう。が併し。「父が上戸で子が上戸、共に酒呑む振りをせず一夜倅が歸り來て、親父の前に手をつけば。父は見るより臂を張り、顔が三

つ四つある様な、化物然たる子はもため、貴様に家は譲られぬ。悴は聞いて嘲笑ひ、こんなぐるぐ廻る家、危険な家があるものか、欲しくはないと眼を据える」。こんなお悟では全く困るとはいへ、兎角憊うなりはすまいか。

#### 四 他力の啓示は到る處にあり

然り、自然界には、實に一貫せる道理が籠つてある。眞に佛心の顯現たること疑ない。看よ。太陽は毎日く必ず東の空から登つて、毎晩く西の空に入る。誠に行儀作法の正しい姿である。夏になれば夏のやうに、冬になれば冬のやうに、照すべきを照し、暖むべきを暖むるまでのことで、決して無駄な餘計な事をしない。是は大に世人の學ぶべきことである。遂に一度も太陽が不行儀にも朝寢をしたとか、晝寢をしたとか云ふことはない。又遂に一度も太陽が夜中に照り出したとか、冬の最中に三伏の熱を越したとか云ふことはない。

花は年々紅に咲き、柳は歳々緑に芽を出す、咲くべき時が来れば、深山幽谷の岩の端狭間にも咲く。散るべき時が来なければ、如何に九重の大奥庭に一枝を焚いて酒を温めやうと思つても、決して散らない。誠に行儀のよい姿である。今年の梅の花は贅澤にも六輪に咲いたとか。近頃の紅葉は生意氣になつて、紫色にもなれば金銀の色も交るといふやうなことはない。誠に我等への活教訓である。

盡日尋春不見春 芒鞋踏遍隴頭雲  
歸來笑撚梅花嗅 春在杖頭已十分

是れはこれ、羅太經が『鶴林玉露』に、悟道といふ尼僧の詩として録するもの。何でも春が見たい、春といふものに逢ひたいと、辨當持で、日がな一日中、野越え山越え、里踏んで春を尋ねたが、尋ねてもく、まだ残んの雪は



ところぐに白く、膚には餘寒の風つめたたくして、春らしい氣色も見えぬ。

ヤレ埒もない、疲れ果て、落膽して我家に歸り、軒端に一二輪ほころびそめた、梅花を撚つて嗅げば、春の氣分は已にこのうちに溢れてある。遠く家を出で、求むるには及ばなかつた。我軒近く春は早や満ちてあつた。

道を求むる者は、この詩に例して大に悟るところがあらねばならぬ。自己を忘れて、理論の山にゆき、文字の野に出で、道は決して探り得ることは出来ぬ。ちかく自己を掘れ、現在只今の自己生活に徹せよ。こゝに大道悠悠春の如くに存し、光々火の如く輝くものがあります。

春眠不覺曉 處々聞鳥啼 夜來風雨聲 花落知多少  
ぼかく、暖めらるゝ光に、暖められては、目覺めずに居られぬ如く、光は既に我内心に滿つ。出で、見よ、御恩に夜は明けたりな。

「慈光はるかにかふらしめ、光のいたるところには、法喜を得とぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ」

かつて、狂歌師なる元の木阿彌が、江戸の麻布邊を逍遙した時、とある稻荷神社の神木に、人の兩眼を書いた紙を貼り、釘を以て兩眼を打ち付けたのを見て、無理な祈願をこめて、人を呪ふ奴があると思ひ、矢立とり出して、直に狂歌一首をその側に書付けた。

目をかいて祈らば鼻の穴二つ、耳でなければ聞くことはなし  
翌日、木阿彌が行つてみると、昨夜深更、祈願主が来て見たのか、今度は大きな耳を書いて、神木に釘づけにしてある。これでもきかぬかと云ふ意氣込。

成程、目では聞けまいが、耳では聞かぬ譯に參るまいと。再び筆をとつた木

阿彌、

目を耳にかへすぐも打つ釘は、つんぼう程もなほきかぬなり

と認めて置いた。いくら耳かとして、迂かりして居ては聞えぬのに、況んや聾者と云ふことがある。これでは云何もならぬ。今夜は云何するかと、翌日行つて見れば、こは如何に。やつたもやつた。大きな藁人形に釘一杯打ち込んで、頭から足まで釘づめた。木阿彌、につこり笑つて書いた一首

稻荷山きかぬ祈りに打つ釘は、ぬかにゆかりの藁の人形

いくら釘打つても應へないのが糠に釘。糠の先祖の藁の人形も、駄目だと教へられて、これきり呪ひも止めたとある。

斯様な、我儘勝手な考へを起して、人を呪ひ、世を恨み、折角の佛心を無にしてはならぬ。人生に徹底せよ。

## 五 米春禪師、米春けたりや

昔、禪法の第五祖弘忍禪師、識高く學博く遠近來り學ぶ者甚だ多かつた中に、一日、蓬髮垢面身に襤褸を紆ひたる乞食、來つて禪師に參謁するあり。師曰く「何の要ぞや」。「我は廬行者と申す者、唯作佛を求む。如何なる職業にても與へ給へ」と云ふ。禪師「槽廠に著き去れ」米春室へでも行つて居れとの事に、彼は其意を領し禮拜して臺所の方へ行き、日々薪を割つたり米を舂いたりして居た。便ち碓坊に入り杵臼の間に服勞し、晝夜息まずに數ヶ月を経たのである。

處へ禪師大衆を一堂に集めて云はるゝは「正法解し難し、徒に吾が言を記し持て己が任と爲すべからず、汝等各自ら意に隨つて一偈を述べよ。若し語意冥符せば則ち衣法皆付せん」何でも己が言葉に付いて廻つて居ては、眞實意は會得出來ぬ、銘々其領得して居る所を述べて見よ。我が意に契ふた者に衣鉢を傳へやうと、五祖が大衆に向つて發表せられた。サア大變。七百有餘の諸弟子、何れも大法の傳持者たらんと欲し、各腦漿をしぼつて、安

心得の領解を示し、我先きにと之を廊壁とて狭きまでに貼り付けた。

身是菩提樹 心如明鏡臺 時々勤拂拭 勿使惹塵埃

とは、上足の高弟神秀の偈頌であつた。人々之を見て賞嘆措く能はず、大法の付囑必ず此人に在りと、羨まぬものもない。米春の廬行者之を傳へ聞き、「可は即ち可なりと雖も了未了矣。惜むべし其意未だ至らず」と。衆信する者がない。強て一僧に乞ひ筆を執らしめ、誦出する所は、

菩提元非樹 心豈明鏡臺 本來無一物 何處惹塵埃

乃ち神秀の頌と並べ掲げられて愕然たらざるはない。

其日、師範弘忍禪師參堂して廊壁の偈頌を點ず。夜半、禪師窺に確坊に至つて問ふ。「米春けたりや」。答ふ「米精げ畢んぬ。未だ簸ざるのみ」。禪師默然、杖を以て臼を打つこと三下。行者亦無言米を簸ること三度。師弟相見て莞爾。あゝ問ふ者は是れ智徳兼ね備へたる大禪師。答ふ者は是れ無學文盲の賤業者。極善最上の法は却て極惡最下の者によつて得らる。知るべし。大道無邊至る所にあり、法門無盡如何なる人も入るを得べし。廬行者慧能は、米春の賤業の裡にだにも、智あり學ある幾百の子弟が、久しく得る能はざりし涅槃妙心を、僅一夜の中に容易く之を體得したではないか。

「時々勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる勿れ」。「本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん」。彼は行入、此は理入。「米春けたりや」。「米精げ畢んぬ」。業障の塵埃を拂拭せよ、塵埃拂拭し畢んぬ。米精げらるゝと共に、心も精げられた。彼は茲に衣鉢を傳へて、禪門第六祖たるを得たのである。

## 六 明來闍去、闍去明來

支那禪宗の一派たる雲門宗の大徳に、徳山宣鑑和尚と云ふがあります。初め教相家に於て、仲々教理に明るく、不平滿々たる勝他の心を持つて、禪宗

の盛な南方へ行脚し、教外別傳不立文字など云ふ、無鐵砲な宗旨を打ち毀してやらうと、勢ひすさまじく南方へ來つて。「澧洲の路上に到るに及んで、婆子に點心を買はんと問ふ」。澧洲と云ふ處まで來た時に、路傍に婆さんの腰掛茶屋があつたから、一ふくしやうと、その團子は幾らだいとやつた。處が婆さん、團子の値を云ふどころか、「大徳車子の内是甚麻の文字ぞ」。大徳の笈(軍子)の中にあるのは何の本かいと、とんでもない事を聞き出した。これが婆さんに解るものか。勿體なくも金剛經の疏鈔であるぞ。フン金剛經かいそれなら其のお經に「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得」とありますが、大徳の點心しやうと云ふ心は、その中のどの心であります。過去心か未來心か、それとも現在心か、それが承はりたい。さもなくば餅は賣られませぬときた。徳山腹が減つて仕方がないけれど、現在心と云へば一刹那で過去心とは云へず、未來心とは尙云へず、ギツクリ詰まつて、口は匾擔に似たり。擔棒(匾擔)のやうに強張つてしまつた。

併し徳山は、この一問に答が出来なくとも、それですごく逃げ出すやうな卑屈漢ではない。自らはグウの音も上がらないながらに、こんな酷い婆々が居る位だから、屹度この邊に大善知識が居るに相違ないと目星をつけた。「近處、甚麼の宗師かある」。近所に誰か名師が居られるか。五六里行くと、龍潭和尚と云ふ大徳がある。そこへ行かつしやれと、婆さん木で鼻汁をくつたやうな挨拶。如來引接の深意は、炳としてこの婆さんの上に顯はれて居る。佛心は昭々として輝いて居る。宿業は正に到來して「未だ肯て婆子の句下に死却せず、遂に婆子に問ふ。近處、甚麼の宗師か有ると」世相の底、人生の裡に、佛光を徹見せんとする處、眞に値千金。

乃で徳山は龍潭の處へ尋ね行つて、玄關前で大音聲に呼ばつた。「久しく龍

潭と云ふ名が天下に響き亘つて居るが、音に聞く程深い潭もない、龍潭は何處に居るか」とばかり乗込んだ。時恰も玄關の衝立の後で、すつくり聞いて居た龍潭、すつと出て来て「汝久しく龍潭に見えたり、深い池の底まで届いたぞ、貴様は話せる奴だ、上れ」とあつて、師弟の約を結んだのであります。

徳山、一日和尚に參禪して夜も更けました處に、「最早後くなつたから歸れ」との言葉。徳山暇を告げて歸らうとして、簾を掲ぐれば外が闇い。「和尚眞闇ですよ」と引込む。「そんならこれでも持つて行け」と紙燭を點して渡す。受取らうと手を差出す途端。和尚フツと火を吹き消して仕舞つた。その刹那忽然として徳山は大悟の境に達したのです。あゝ眞に、明來闇去、闇去明來と云ふべきか。暗いと自覺した刹那、パツと光る光は、無限の輝である。

「無礙光如來の名號と、かの光明智相とは、無明長夜の闇を破し、衆生の志願をみてたまふ」「和讃」似通ふた邊があるのではなからうか。

## 七 俱胝一指頭の禪

朝から晩まで、『俱胝佛母陀羅尼』ばかり讀んで、俱胝和尚の名を貰つた和尚が、唐朝の中頃に居ました。普通一ヶ寺の住持になりすまして、頑張つて居る處へ、一人の尼僧がやつて來た。「御免」とも何とも云はず、いきなり座敷へ上がつて、笠被つたまゝ鞋穿いたまゝで、ツイと奥座敷に入るや、否や和尚の坐つてゐる禪床をグルグルツと三遍まはつた。誠に眼中和尚なしと云ふ振舞。そしてその言ひ草が悪くらしい。「道ひ得ば即ち笠子を下さん」何うか一句有難い事を云ふたら、笠脱いで禮拜もしませうが、さあ云何でござると云ふ勢。和尚一向に口が開かない。如何でござる、云何でござると、疊かけられても返辭が出ぬ。眼ばかりパクつかせてゐる。全然墓蛙の化物みたやうな有様。尼さん尠からず愛想つかしたものか、こんな馬鹿面和尚がと云は

ぬばかりに、ツイと庵室を出て行つた。時恰も夕暮である。「云何ぢや泊つて行かれたら、日も暮れかゝつて、何れ何處にか泊らねばなるまいに」と云へば、尼さん、すかさず遣り返す。「道ひ得ば即ち住まらん」何とか法門を云うて聞かつしやい。そんなら投泊もしませう、さあ云うて見さつしやいと來て、和尚またも答が出来ぬ。据人形そのまんまに口あんぐり。尼さん、こんなヤクザ和尚の處に泊つたからとて何になると、嘲る心を見せ、サツサと出て往つて仕舞つた。

あとで和尚、残念でたまらない。身は頭を剃つて袈裟かけて、禪宗坊主と云うて居ながら、僅比丘尼の一間に何の答も出来ぬとは、耻づかしい情ない最早一刻も平然として居れぬ。寺も何も打捨て、天下を遍歴し、名師を求めて修行しやうと思ひ定めました。すると其夜の夢に、鎮守の山神が現れて、「それだけ堅固の願心があれば、何も寺を捨て、遠く他所に行くには及ばぬ近い内に必ず肉身の菩薩が出て來て、爲に法を説くから、就いて充分修行せよ」と勧めるのを感じた。一週間目に果して天龍和尚と云ふが出て來た。馬祖道一門下の尊宿、大梅法常禪師の法嗣たる天龍和尚、この人ならばと、先日的事を語つて、吳々も教を乞ふた。すると天龍和尚は何も云はずに、スーツと指一本立てる。その刹那、俱胝、豁然として大悟し、今迄の大疑團がガラリと解けた。爾來指一本の味が甘く手に入つて、何でも彼でも指一本。「如何なるか是れ佛法の大意指一本グツと立てる。「如何なるか是れ祖師西來の意」指一本ニツツと出す。今日は好い天氣でござる、指一本。近頃嚴しう寒うござる、指一本。お障りもござらぬか、指一本。恁んな有様に何を尋ねても、指一本でやつける。一生涯指一本使ひ使つたが、まだ使ひ盡せぬと、死に際まで叫んだと云ふ次第。「俱胝一指頭の禪」と云つて、それが俱胝

和尚の名物となつた位。

この有様を始終見てゐた侍者たる童子。十四五歳にもなつてゐたらう、い  
つしか之を眞似て、矢張り指一本立てる。此頃和尚は云何な説法せらるゝか、  
指一本。身體ばかり大きくなつてもいかぬぞ、指一本。お主もこれから坊さ  
んになるだらうが判るか、指一本。和尚の眞似ばかりでつまらぬぞ、指一本。  
而も童子は得意満面であります。此事をそつと俱厖和尚に知らせた者がある。  
「よしきた一つ試してやらう」と和尚の非常手段。和尚は童子を喚んでいきな  
り「其方は佛法を會得して居ると云ふが本當か」。左様!」。云ひもあへぬに  
和尚。「如何なるか是れ佛?」。童子ズツと指一本出した。「この野郎生意氣に  
……」と、隠し持つたる小刀で、ズボリとその指を切り落して仕舞つた。さ  
あ堪まらない。アイタ、と悲鳴を擧げつゝ室内を走りまはる途端。「こら小  
僧」と呼び留めた。チラと顔を向けるなり、「如何なるか是れ佛?」ハツと指  
を示され、ありもせぬ指を立てやうとして手を擧げた刹那。忽然大悟して本  
眞のものが手に入った。

あはれ天龍の指・俱厖の指・小僧の指、指に違ひはないが、その心に就て  
は大違。形だけを眞似たのでは仕方がない。指一本ゲツと示された時、ハツと  
一を悟る。一は一心である、一向である。「汝一心正念にして直に來れ」と一  
を以て示された時、ハツと一を以て受取る。拵へた一心でも、眞似た一向で  
もいかぬ。凡夫自力の手前味噌がズボリ斬り落された時、かゝる者をと、如  
來の親心がぞつこん入り込んで下さる。「親鸞一人が爲めなりけり」と、まる  
く呑み込まれた處は、もう自由自在だ。「一生受用して盡さず」願力の大道  
は、一生受用してもく盡さず、自力根性の指がすっかり無くなつた時、善  
知識の言葉の下に歸命の一念が發得する。「眞心徹到して苦の娑婆を厭ひ、

樂らくの無む爲ゐを欣ねひ、永ながく常じやう樂らくに歸きすべし。但ただし無む爲ゐの境きやうは輕けい爾じにして即すなはち階かふべからず、苦く惱なうの娑し婆はは輒てう然ねんとして離はなるゝことを得うるに由よしなし。金こん剛かうの志こころざしを發おこすに非あらずよりんば、永ながく生しやう死じの元もとを絶たたんや。若もし親まのり慈あ尊たに從したがひたてまつらば、何なんぞ能よく斯この長ながき歎なげきを免まぬれん。〔序分義〕

## 八 識しらず廬ろ山ざんの眞しん面目めんもく

東とう坡ぼ居士こじ、かつて京けい師しにあるの日ひ、年ねん少せう氣き英えいの資しを以もつて、遍あまねく天てん下かの名めい僧そう知識ちしきを檢けんせんと志こころみし、偶たま玉く泉せんの皓こう禪ぜん師じを訪とふ。禪ぜん師じ問とうて「貴き官くわんの名なは」  
といへば「秤びん」と答こたへる。謂いふこゝろは、天てん下かの名めい僧そう知識ちしきを片かたつ端ぼしから秤はかりにか  
けてみやうぞと、云いふ意いき氣き込こみ。禪ぜん師じ忽たちちカかつツと大たい喝か一せ聲い「此この一か喝か重おもさ多た少せう  
ぞ」この一か喝かの重おもさ、秤はかりにかけてみよ、とてもかゝるまいぞ、棒ぼうが折をれて了しま  
ふぞとやられて、流さ石すがの東とう坡ぼもぎつくり、返へん事じが出でない。去さつて金きん山ざん寺じの佛ぶつ  
印いん禪ぜん師じに就つく。東とう坡ぼ、佛ぶつ印いんの室しつに入いらんとするや、忽たちち一せ聲い「この間かん、汝なんぢの  
坐ざ處しよなし」這はい入いつても坐すわる處とこはないぞ。暫しばらく和をしやう尚しやうの四だい大だいを假かりて禪ぜん床せうとせん」  
和をしやう尚しやうの頭あたまでも圓ゑん座ざにしませう。何なんツ頭あたまでも、「山さん僧そうの四だい大だいもと無む、五う蘊うん有うにあ  
らず、何なんを以もつてか禪ぜん床せうとせん」四だい大だい五う蘊うん一切さい皆みな空くう。何どこ處こへ坐すわるのか。うつか  
り坐すわつて腰こしが抜ぬけやうぞ。とやられて東とう坡ぼまたも石いし地ち藏ざう。爾じ來らい熱ねつ心しんに研けん鑽ざんの  
功こうを積つんで、漸やうやくその妙めう境きやうに達たつした。

東とう坡ぼの禪ぜんは一個いこの廬ろ山ざんを以もつて盡つくされてある。その廬ろ山ざんも見みやうによつては  
種いろく々くである。須しよく活くわつ眼がんを開ひらいて根こん柢ていに徹てつせねば、所しよ詮せん得うる所とこはありませぬ。  
居こ士じが投とう機きの偈げは左さの三さん首しゆであります。

横よこ看かん成せい嶺れい側せ成せい峰ほう 遠ゑん近きん高かう低てい各かく不ふ同どう

不ふ識し廬ろ山ざん眞しん面めん目もく 只ただ緣えん身みん在ざい此こ山ざん中ちゆう

同おなじ一いっの廬ろ山ざんでも「横よこ」さまに看みれば嶺れいとなる、側そばてば峯みねとなる「平ひら」つたく布ふ團とん



きたる姿の嶺ともなれば、突立つて聳えた峯とも成る。「遠近高低各同じからず」悉くが違つて見える。何れが廬山の眞面目か。どつちともつかぬ。廬山の本來は、高からず、低からず、遠からず、近からず、嶺にあらざ、峯にあらざして、同時に嶺たり峯たり、近くあり遠くある處に存するのである。人生は詰まらぬものと云ふも眞面目ならず、人生は結構なものだと云ふも眞面目ならず、人生は詰まらぬものであつて、而も同時に結構なものである。人生に頭を突込んで居ては、人生の眞相は見えぬ。「廬山の眞面目を知らざるは、只身の此の山中に在るに縁」。廬山の中に這入つて居ては、到底解るものでない。遠近高低四方八面から望んで、初めて其の眞面目を窺ふことが出来る。

廬山煙雨浙江潮 未到千萬憾不消

到得還來無別事 廬山煙雨浙江潮

差別が即平等、平等が即差別。遠近高低のあるまゝが無い。無いまゝが有る。書き來つた廬山の眞面目を打破し去つて、そこに現はれ來る眞の面目、正見から出で、正見に還る。こゝに絶待の妙味がある。この妙味を味ひ來つて、果然實在の妙音に接し、天地の好景を看取し、法身の靈境に徹到するところが出来る。

溪聲即是廣長舌 山色豈非清淨身

夜來八萬四千偈 他日如何舉示人

解釋に深味を與へよ、事に徹底せよ。中途半途なる生くらなる百藝に通ぜんよりは、唯一藝に達せよ。そこに無限の靈光は輝き來らん。獨り廬山の對觀のみならず、指頭屈伸の啞問答、亦不盡の靈音に接することが出来る。

或禪寺へ行脚僧が來て、和尚に面會を乞ふた。取次の小僧氣をきかしてか

「和尚は留守ぢやが用事なら聞きませう」といふ。「小僧では駄目だ」と嘲笑ふ。  
「形は小さくとも智慧は大きくござるぞ」とやつた。此奴面白いと行脚僧は、  
指で小さい輪形をして見せた。小僧すかさず大手を廣げて見せる、指一本を  
出せば、五本を出す。更に三本を出せば、指で一寸目の下を押へる。行脚僧は  
恐れ入つて三拜九拜愴惶に去つてしまつた。行脚僧の方では、小さい輪を造つ  
てお前の胸はと問へば、大海の如しと大手廣げる。お前の一身はと指一本出  
せば、五戒を持つと五本出す。三界はと三本出せば、目の下にありと目の下  
を押へる。最う叶はないから逃げ出したのである。處が肝心の和尚には一向  
解らぬ。襖陰から見て居て不審で堪まらない。小僧を呼んで聞けば、小僧の  
曰くさ。「あれは屹度俺の生れを知つて居ると見えまして、お前の内の餅は此  
位ぢやと、小さな輪をしてみせますから、恁んなに大きいのだと手を廣げて  
見せました。一文かと一本出したから、五文ぢやと五本出せば、三文にせよ  
と云ふから、赤目をしましたのぢや」と云つたとの話。同じ指と指との問答  
ながら、此中に一大眞理を發見するのも、餅屋問答位で濟ますのも、皆其人  
の見識如何によるのであります。

これに似た話が米國にもあつたと云ふ。英國の哲學博士が米國の大學を參  
觀した折のこと。この大學に片目の小使で、至極面白い男がをる。職員連中  
博士に向つて「我校に啞の哲學者があります、博士之と問答せられては」と申  
込み、一方小使の男に向つては「今日英國の啞の學者が來られたゆゑ、汝も  
手眞似して話せ、決して喋舌つてはならぬ」と言渡し、後博士と小使と一室  
に入る。博士はつくづく小使の顔を視入つて、指一本を示し「萬物唯一神」と  
聞く。小使指二本を以て「天地」と答ふ。博士大に感心し、今度は指三本を出  
し「天地人と別つべきものならずや」と聞くと、小使直に拳を揚ぐ。これは

「三體ありと雖も、合して一體なり」と答ふるに似てる。茲に博士は恐縮して去る。後で小使の曰く「今の啞は人を馬鹿にしてゐる。己の顔を穴のあくほど見やがつて、指一本で片目だなアと云ふから、左様です、貴下のは二つあると、己が指を二本出す。すると又指三本出しやがつて、合せて目が三つあると云ふから、糞ツ、思はず、拳固を固めた。奴さん慄へ上がつて逃げ出したのよ。ざま見やがれ」。

## 九 佛魔一紙の分水境

元日の吉凶については、色々面白い話が遺つて居ます。早朝、土瓶を打ち割つた下女、危ふく主人の大目玉を頂く處を、

元日や土瓶と貧の底ぬけて、あとに残るは金の釣のみ  
と詠んで、却て大賞にあづかつたなどは、仲々氣がきいてゐる。

茲に山田潔と云ふ人。羽織袴に身をしつらへ、屠蘇雜煮餅も祝ひ終つて、扇子片手に、いざ廻禮と出かける處を、十歳ばかりの乞食が門前で泣いて居る。いや何たる不吉な事であらう。山田君は氣が氣でない。一年の計は元旦にありと云ふに、縁起でもない、元朝早々泣聲を聞く。今年も目茶々々ぢや、いまくしい。いつそ廻禮を止めやうかと思つたが、ふと思ひ出したのは寺の和尚さんである。和尚さんに願ふなら、此の不祥事を扱うて下さらぬこともあるまいと、足を急いで檀那寺へまゐりた。和尚さんに面會して「門前で子供の泣いて居た不祥を扱ひ除いて下さい」と頼みますると。和尚さんはニコくしながら「山田さん、此様な喜ばしいことはない、昨年まではお前さんも、貧乏神に取りつかれて居たと見えて、月末毎に首も廻らぬ苦しさであつたが、今年は福の神が舞ひ込んで來たのぢや」と云ふ。山田はドーモ合點がゆかぬ「ナニ小供の泣いて居たのは、福の神が舞ひ込んで來たのだと

云ふのですか、馬鹿くしい」。イヤ山田さん能く聞きなさい、一首の歌ぢや、

七福に貧乏神が追ひ出され、門の處でわいくと泣く

「成程これはあり難い。不吉ぢや不祥ぢやと思ふたがこんな喜ばしいことはない」と、機嫌直して禮廻りをすまして、我家に歸つたは丁度正午時であつた。

さも愉快さうに妻に向ひ「今朝寺の和尚さんから、誠にめでたいことを承はつて来た。外でもないが、今朝廻禮に出かけると、門前で小供が泣いて居る、さて不吉な事ぢやと思つて氣を腐らして居ると、流石は寺の和尚さん、七福が貧乏神に追ひ出され、門の處でわいくと泣く。ドーダめでたからうが」と云ふと、妻は怪しげな顔つきで、「モー一度云うて下さい、其歌を……」。ウム能く聞け、七福が貧乏神に追ひ出され……。「なんと仰る、七福が貧乏神に追ひ出され、それが何で目出度いのです」と云はれて「なるほど是は怪しからぬ、元旦早々寺の和尚め、人を瞞しよつたな……」怒氣満面直に寺へ驅け付けた「今朝聞かせて下すつた歌は、何と云ふのでしたぞ」と問へば。今朝の歌か「七福に貧乏神が追ひ出され、門の處でわいくと泣くと云ふのぢや」と答へる、「成程、やはり内の嬢めが間違へて居たのぢやドーモ有難う、左様なら」と捨言葉を残して立歸つた。寺の和尚さんは、何が何だか、サツパリ譯が分らぬ。山田は家に歸るなり妻に向うて「やはり貴様が間違へて居たのだ、和尚さんには間違ひはない、耳の孔をさらへて能く聞け、七福が貧乏神に追ひ出され門のところ……」と云へば「七福が貧乏神に追ひ出されて、何が目出度いのです、貴郎はドーカして居なさる」と云はれて見れば一言もない「七福が貧乏神に追ひ出され……なるほど是は變な歌ぢや、寺

では大層めでたい歌ぢやつたが、家へ歸ると不吉な歌となる、妙ぢやナア、  
よしくモ一度寺へ行つて尋ねて来る」と云つて、三度目に寺の和尚さんに  
遇うて、今度は其歌を紙に書いて貰うて家へ歸つて妻に示した。好くく仔  
細に吟味して見ると、七福にを七福がと誤つたので、目出度い歌がとんと不  
吉な歌となつたのであつた。

元來、小供の泣聲に、何時のかはりはなければ、祥不祥の別もない。唯そ  
の人の心得如何にあるのみ。〇〇の入りちが、祥不祥の分岐點たる如く、  
世は眞に佛魔一紙である、心を弘誓の佛地に樹てよ、念を難思の法海に流せ  
よ。人生は實に汚濁にして罪惡の結晶なるも、其まゝ如來の慈光は、皓々と  
して照耀無礙なる尊き。茲に徹見して、樂き人生は來らん。

世の中はこそその二文字の付け處、治まるもこそ亂るゝもこそ

## 十 蚊帳一つにても

「貧乏はしても正月は来る。新しい年は迎へねばならず、と云つた處で錢は  
なし、子餓鬼は餅を欲しがるし、仕方がないから、差當り不要な蚊帳を質に  
入れる、入れたものゝ、恚ふ蚊が食ふ時節となつては困つたものぢやのう」と  
親爺は破團扇を片手に歎息する。側から女房が、「あの時はまア今は要らぬか  
らと思ひましたが、恚ふ蚊が出て來ては全く叶ひません、と云つて代りにや  
る布團はなし、何ぞ出す工夫はございますまいか」。「左様ぢやのう、二人だ  
けなら單衣を被つてゝも堪へるが、子供はそれでは聞かないし。何ぞ出す工  
夫と云つたとて……。オウ出たく」。「出たつて何がいのう、蚊が出るばか  
り、まさかお金が出はすまい」。「お金ぢやない歌がよ」。「歌が出たつて歌で蚊  
帳が出されはすまい」。「まアよう聞け恚んな歌が出た」。

忘れても置くまいものは蚊帳の質、外で利がくう内で蚊がくう

ほんにつまらぬではないか。間違へてゝも忘れてゝも、蚊帳の質だけは置くものでないぞと云つたさうな。

お寺参りは年寄の氣慰み仕事、佛法聽聞は若い者のする仕事でないなど、向ふの方へつきやつて我儘ばかり定めて置くと、目前の時には、利にくはれ蚊にくはれる段の事ではない。此世では淺間しい日暮をいたし、未來は永く火柱抱いて泣き明かさにやならぬ。

忘れても聞くべきものは法の道、外で褒められ内で安心

或木賃宿に泊つたお客。朝になつて主婦さんに怒鳴りかゝる。「昨夜の蚊帳は破れて居たに相違ない。一晩中蚊に食はれて困つた。あんな破れ蚊帳を釣つて、木賃は拂はぬぞ……」。「何を仰しやる、破れては居らぬ筈。何處に寝まれました」。「つひその入口へ」。「ハアそれでは彼處に暖簾があつたからそれを潜つたのでせう」。云はれて見れば「成程自分が粗忽であつた。一杯聞召してゐた拍子に」位で濟んで了つた。さて其晩客はまた酒に酔うて、寢間へ轉げ込んだ。今度は主婦さん氣をきかして、暖簾を巻上げて置いた。それとも知らぬお客。昨夜のに懲々と見え「これは暖簾とさ、今度は蚊帳とさ」。アラまた蚊帳の外に出た。氣の毒なのはお客、昨夜は蚊帳の手前で、今夜は蚊帳の向ふで、二晩とも蚊に食はれて了つた。

佛法を以て世渡りの道具と心得、現世祈りの種にする人や、一時の氣慰み半分に聽聞するやうな人や、蚊帳の手前に寝て居るもの。佛法を鼻にかけ極樂を我物顔にし、御慈悲を未來の方へ突き遣つてゐるのは、矢張本願の蚊帳の向ふへ抜けて居るのぢや。共に佛法の眞意が解らぬ、這入つた積りで這入つて居らぬ。此世さへ甘く切抜ければ未來は云何でもと云ふのも、此世は假の宿未來さへ助かれればと云ふのも、共に蚊帳の外で蚊に食はれるのぢや。

人生問題に目が覺めて、他力本願の蚊帳に入らねばならぬと氣付いたら、投出の信仰や手造りの安心でなく、乗彼願力と其中へ轉込むがよい。

而してその蚊帳に這入るには、頭を屈め頭を下げてゝなければならぬ。大名ぢやとて、侍ぢやとて、高等官ぢやとて、立ちはだかつて、大手振つて這入る譯にはゆかぬ。這入つたらそれこそ大變。「大名もかぐんで這入る蚊帳の中」。俺は大名ぢやぞとて、自ら力んでも仕方がない。如來本願の蚊帳に這入るにも、矢張り「我身は悪き徒者」地獄一定と、我れ物知顔も、我れ心得顔も、我身あり顔も打ち捨てゝ、斯る機までも御助けと、打ちもたれつゝ本願の他力の中に轉げ込むのである。加賀の千代は詠んだ。「煩惱の蚊は追へども去らず、菩提の螢は招けども來らず、さらば計らひの團扇を捨てゝ」と前書して「丸はだか他力尊や蚊帳の中」。こんな涼しい事、こんな有難い事はない。こゝが私共の信仰生活である。此一生を如來の御慈悲の蚊帳に包まれて、嫌な蚊の聲も音楽と聞きなしつゝ暗の夜を明かし、夜が明けると御日様拜む如く、娑婆の終り臨終の時、生死世界の夜が明けて、瑠璃の大地に大悲の親様を拜むのである。

他力の啓示は到る處にあり。蚊帳一つでも悟を得る御縁となる。

~~~~~

折れな折れじと親竹子竹、すがり合ふたる雪の朝

辛抱しやんせきりくしやんと、掛けた襷の切れる程

迷ふ紫陽花七色かはる、色が定まりや花が散る